

【ねがいましては】

平成17年6月28日

第178号

KYOWA SCHOOL

「シグナル」

最近ひょんなことから病院通いになってしまいました。『おでき』をくすぶらせたままにしておいたら爆発炎上し、手術と相成ったわけです。この期がチャンスとばかりに病院で本を読みます。『天の瞳幼年編II』灰谷健次郎（角川文庫）

その中に、主人公の友達が家出をする場面があります。私はその友達の気持ちにこころを縛られます。なぜ家出をしたのか・・・？ こたえは『さみしい』です。あまりにもご両親が少年の心を薄っぺらく扱っていたことが、少年を極限に追い込み、「おかあさん、おとうさん、こっち向いてよ！」とばかりに家出をします。

少年は自分の家に友達を呼ぼうとはしません。なぜか・・・。

これは確かに小説のひとコマかもしれません、ここ最近起る多くの少年たちの事件裏には、このようなシグナルが潜んでいるような気がします。

いつでもどこでも、子は親から見つめられたい、親の気持ちが自分に注がれていてほしい。仮面をかぶったような、こころに飾りをつけたような、表面だけ見栄え良くつくられたこころなどいらない。本音で触れてほしいと願っています。良いことも悪いことも、嬉しかったことも悲しかったことも、みんな話したいのです。それを聞くときのやさしいお母さんのまなざし、やさしいお父さんのまなざし。

この瞬間、子は「ああ、ここに生まれてよかった！」と思います。

すべてを受け止めてくれるところ、『家族』・・・。この許容が子には最も必要と思われます。許容→愛情、とでも形容できるでしょうか。

ここへ入ってきたとき、「ぼくはきっと何をやってもダメに違いない。」と、うつむき気味だったTくん。この数ヶ月、大きく変化しました。パソコンの中に『100マス』をトレーニングするものがあります。彼はその中で四段をとります。100マスを40秒以下で打ち終わらないとならないわけですが、今の彼の表情は『明るい』です。中学校の期末テストが近づき、数学の計算分野に集中します。本人にも信じられない集中が続きます。

こころが温かくなったのです。

ある日、ある子が誤って掛け時計を落とします。「ガチャン」とガラスが割れ、時計も破損します。中学3年生の男の子を中心にガラスを拾い集めます。すると、中学2年生の男子が掃除機を持ってきます。「ヒュー」という音とともに、みるみる教室は元通りになります。

わたしがやりなさいと頼んだわけではなく、周りの誰かが頼んだわけではなく、風がそっと吹き抜けるようにその光景は流れました。「こんな子ばかりに囲まれている私は、いったい・・・。」

Campが近づいています。今年は例年になく勢いがあります。あつという間に定数の20名が埋まりました。もちろん越えても全員参加します。この子達の間でどのようなドラマが作られるのだろう。私はそっと見守る側に徹します。もちろん「ああしなさい、こうしなさい」などと命令などありません。彼らが皆、それぞれが自分を見つめ、自らのこころで判断し行動します。学年の垣根を飛び越えて、勉強が出来るの出来ないのなどどこへやらです。

子どもたちから「成績」、大人なら「役職」・・・？ 子どもたちから「教室」、大人なら「部署」・・・？ 子どもたちから「学校」、大人なら「会社」・・・？ それぞれ環境が大きく変化したら、どんなに心は安らぐでしょう。

全社員が思いやり助け合って、生き生きと取り組める会社があったとしたら・・・。

今のきびしい競争社会の現実を、そのまで良いと思われているお父様、お母様は、少ないと私は思います。もし今の役職から開放されたら・・・。もし今の部署から開放されたら・・・。もし今の会社から・・・。と、お思いの方が多いと思います。生きてゆくには仕方がない・・・。これが現実だから・・・。

子どもたちに今を強制させるのは、残酷極まりないと思います。まだまだ心が不安定な年頃にはあまりにも残酷です。それよりなにより、『人らしさ』を思い切り蓄えることの方がどれだけ大切であるか。将来、辛いこと悲しいことがあったとしても、小さい頃に蓄えた『人らしさ』は、しっかりガードしてくれると思います。

そして『ひとりしさ』を感じることの出来る『居場所』が必要です。なぜなら辛い時、悲しい時、すぐにでもそこへ行けますから。まずはお父さんお母さんのところ、もし留守だったら、ここがありますよ・・・みんな。

そのガード役の先頭にいらっしゃるのは、おかあさん、おとうさんであることは当然です。わたしはその脇役として傍らにいさせていただきたいと思っています。

家出・・・きっとこの子たちはないだろうな。もししたとしても・・・ここへ来るだろうな。

*夏の予定・夏休みくりラン・・・出来上がり次第お渡しします。